



施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602
4月の休館日:7月・14月・21月・28月

5月15日(木) 19:00~
井上陽水コンサート 2008
指定 8,400円
【残席わずか】
※完売の際はご了承ください。



6月15日(日) 13:00~16:00~ 2回公演
こどもちゃれんじ ファミリーシアター
しまじろうと ゆうえんちへ いこう!
指定 1,500円(3歳以上)

【4月20日(日)発売開始】

※発売初日は電話による予約販売のみ(一人6枚まで)
※発売初日の窓口での販売はありません

ひこね市民大学講座



第1講

7月12日(土) 14:00~
「言葉のチカラ~私の選んだ道~」
市原悦子さん(女優)



第2講

9月7日(日) 14:00~
「日本の政治経済のゆくえ」
宮崎哲弥さん(評論家)



第3講

10月4日(土) 14:00~
「環境と健康」
北野大さん(工学博士・明治大学教授)

☆料金:全席自由 4,000円【4月27日(日)発売開始】
※1講座だけの購入はできません。
※未就学児の入場はお断りします。
※要約筆記の必要な人は、各講演日の10日前までに申し込んで下さい。

マーク:託児サービスがあります。(要予約)
※公演日の1週間前までにご予約ください。
マーク:公演終了後、彦根駅行き・南彦根駅行きの臨時バスの便があります。(有料)

チケット・入会のお申し込み、お問い合わせは
チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)

市民体育センター

☎23-2293 FAX 23-2294
4月の休館日:1火・8火・15火・22火
・30水

5月17日(土) 14:30~
ひろみちお兄さんの親子体操教室
☆体操のお兄さんとして大人気の佐藤弘道さんが、体操の楽しさを伝えてやります。
自由 1,000円(2歳以上)
※観覧希望者も入場券が必要
※残席わずかです。完売の際はご了承ください。

彦根城博物館

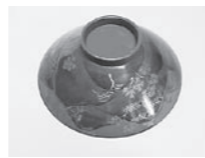
☎22-6100 FAX 22-6520
4月の休館日はありません。
4月15日(火)~同17日(木)は展示替えのため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30~17:00(入館は16:30まで)

~4月15日(火)

「桜の美」

桜の季節は、気もそぞろ。展示室も桜花爛漫です。能装束や漆工品に、日本の伝統的な桜の美を探ります。



▲朱漆塗吉野山蒔絵盃

4月18日(金)~5月20日(火)

「国宝・彦根屏風」

近世初期風俗画の傑作、国宝・彦根屏風を公開します。



▲国宝・彦根屏風

観覧料が必要です

ギャラリートーク「国宝・彦根屏風」

4月19日(土) 14:00~15:00
解説:本館学芸員 高木文恵(たかき ふみえ)
※事前申し込みは不要です。当日館内講堂にお集まりください。

ほんもの出会

常設展示の名品

譜代大名筆頭・井伊家に伝来した大名道具を中心に、日本の美と歴史にせまります。
「武器・武具」「能面・能装束」「茶道具」「湖東焼」「雅楽器」「調度」「絵画」「古文書」などの名品が次々と登場します。

4月18日(金)~5月20日(火)

兎耳形兜

頭形の鉢の左右に兎耳を、頭頂に巻毛型の張懸を施した変わり兜。



常設展示の名品

※必ず上靴をご持参ください。
※動きやすい服装でお越しください。
※託児サービス(2歳未満)があります。
希望者は4月27日(日)までに電話で申し込んでください。ただし、定員になり次第締め切ります。



チケット販売場所

ピバシティ彦根(くらしのサービスセンター)、アル・プラザ彦根(くらしのサービスセンター)、ひこね市文化プラザチケットセンター、市民体育センター



▲写真1 高士と琴を担ぎ従う童子(四季山水図より、江戸時代)

「琴」(こと)というと、私たちは、邦楽の山田流や生田流の13絃の琴を思い浮かべます。これらは、本来「箏」と呼ばれていました。その原型になったのが、雅楽の箏です。箏は、同じ13絃で、全長約190cm、奈良時代に中国から伝えられ、広く行われていました。

一方、もともと「琴」は、絃楽器全般を指し、琵琶の琴・箏の琴というふうに使いました。

そして、ややくらいに、「琴」(こと)とは別に、「琴」(きん)という楽器があるのです。七絃琴を指します。これも中国伝来の楽器で、全長約120cm、雅楽の箏とは、形も大きさも異なります。中国では、琴棋書画(琴・囲碁・書道・絵画)が、士君子(知識人の嗜みとされました。なかでも琴は、清らかで奥深い精神をあらわすものとして重視されました(写真1)。実際、琴の音を聞いてみると、静かに心を澄まして味わう、微妙な音色です。奈良時代に伝えられましたが、日本人の感性には合わなかったようで、平安時代中期には、あまり行われなくなりました。

その後、数百年の時を経て、江戸時代の延宝5年(1677)、中国から心越興儒(号東阜、1639~1695)という禅宗の僧がやってきます。徳川

光圀に招かれて水戸・天徳寺(のち祇園寺)に任持しました。能書家として知られ、篆刻や画に通じ、琴にも堪能で、その演奏法を伝えました。この東阜に始まる流れが、儒教の学者や文人の間に流行し、琴士と呼ばれる人々を輩出します。そこには江戸時代の中国趣味の流行という側面もありました。彦根にも、「琴書を楽しむで隠を全せり」といわれた、儒者の沢村琴所(1686~1739)のように、琴に親しむ人がいたようです。

琴の実物も伝えられています。井伊家伝来の楽器の中に、中国・明代の制作と見られる古琴があります(写真2)。付属する文政11年(1828)の書付には、かつての所持者を、「木下若狭守勝俊、長嘯子と号す」としていま



▲写真2 七絃琴(伝木下長嘯子所持、中国・明代)

す。木下長嘯子(1569~1649)は、豊臣秀吉の妻高台院(北政所)の兄の子で、福井の小浜城主でした。歌人として知られ、関ヶ原の戦いの後には、剃髪して京都に閑居しました。長嘯子が琴を弾いたかどうかはわかりませんが、東阜がやってくる前ですから、本格的な琴の弾法を伝える人はいなかったと考えることができます。文人の必需品である琴を、古く珍しいものを尊ぶ「古玩」趣味から所持していたのでしょうか。徳川家康(1542~1616)が、中国・宋時代の老竜吟という琴(徳川美術館蔵)を、漢詩人・石川文山(1583~1667)が、明時代の琴(詩仙堂蔵)を所持していたように、古琴は、伝統的な中国文化を身につけていることを示すステータスシンボルでもあったのです。

(彦根城博物館学芸員 齋藤 望)

長嘯子所持と伝える七絃琴は、常設展「ほんもの出会」で展示します。(4月16日(金)~5月19日(月))

とまの玉手箱

博物館からのメッセージ



第140回